

居り場 3つの「和」

あや ひろし
綾 宏
Hiroshi Aya
さかいで
坂出市長(香川県)



はじめに

先般、全国市長会会長を勇退された前防府市長の松浦氏が、常々おっしゃっていたのが「われわれ、市長は昼夜を問わず、正に身体を張って市政(仕事)に向き合っている。非常に過酷な仕事である。実際に私が就任中にも幾人もの現職市長が亡くなられた。市長が元気でなければ市政運営はできない。何か一つでも、自分の身体を労(いた)わらない。何か一つでも、自分の身体を労(いた)わらない。何か一つでも、自分の身体を労(いた)わらない。また自分だけの時間を取ることが大切であるし、実行すべきである」

全く同感で、市長は日々なかなか休日も取れず身体も休めず、ましてやメンタル面ではストレスの塊ではないでしょうか。家庭や家族をあまり顧みず、夜討ち、朝駆けの活動は災害時のみならず日常的にもあるものです。ましてや居住地の地域の活動も疎(わづ)かになり、女房任せになりがちです。

一般的に、人は色々なコミュニティの中で生活しています。それには大きく3つの分類があり、一つ目は仕事(職場)の和、二つ目は家庭や地域の和(居住地)、三つ目は趣味の和(個人的な趣味も勿論あるが)です。これらの違ったコミュニティでの和というかコミュニケーションがバランス良くうまく取れているとストレスは溜まりにくいそうです。

仕事(職場)の和

昔は「エコノミックアニマル」と揶揄(や)され

るような家庭を顧みない仕事人間も多かったです。こうした方たちは、アフターファイヴで職場の仲間と飲みに行つて上司や会社の話をすることでストレスの発散をしていました。ただ、現在はそうではないかもしれません。最近の若い人は飲酒運転の回避もあるようですが、職場の仲間と飲みに行く機会が減つたように思います。また、複数の幹部職員から「仕事の延長での飲み会はそもそも職務なのか、残業に当たるのか」と若手職員から質問を投げ掛けられたと聞きました。それを受けてか、それからは職場での飲み会は随分減つてきているようです。決して強要するわけではないのに、軽い飲み会の誘いでもパワハラやセクハラを考(かん)えなくてはならず、上司にとっては世知辛い世になってしまいました。このような状況下では、上司のストレスは積もる一方で、どの自治体でもメンタルヘルスの問題を抱える職員が増えている傾向にあり、その対応に四苦八苦している現状にあります。そういったストレスを溜め込んだ職員は同僚や友人などに話を打ち明け同感してもらふことで、少しでもストレスを和らげることができるとは思いません。

しかし、市長はそもそも余程(よほど)の腹心が居ない限り、孤独な存在です。なぜなら決断、



かわいい孫2人と筆者

判断は最終的に市長が下すもので、全責任を負う重責が常にあるからです。こうした中で、毎日大勢の市民、職員、議員等とコミュニケーションを取り、その都度、立ち止まって冷静に公平、公正に判断する時間や、種々の情報を得て、将来をクリエイティブする時間が必要となってきます。

しかし、そうした時間を取ろうにもなかなか休みが取れない分、松浦前全国市長会会長もおっしゃっていたように、私は昼休みを確実に1時間以上取り、脳と身体を休めるように心掛けています。私は市役所の近くに事務所があるのでそこで昼食を取り1人の時間を持つようにしています。市役



舞台『未来へつむぐ』香川公演へ出演する筆者



地元劇団の本公演で熱演する筆者

所に居ると何かと不意の面談等が入りますので(笑)。

家庭にこころ

次に家族についてですが、私には子どもが5人おり、うち3人が既に結婚しています。また、それぞれ関西に3人、海外に1人、地元には1人住んでいます。そして、この度、地元に住む長男が居宅の敷地に新居を建てると言い出しました。女房は孫が2人いるので近くに住んでくれるのは大賛成でしたが、私は選挙の年だったので少し大変でした。この新居は今年完成し、今では毎日にぎやかに過ごしています。私の居宅は夫婦2人に犬2匹が住んでいます。犬が2人の孫にジェラシーを抱き、にぎやかと言うよりは本当に騒がしい状況です。

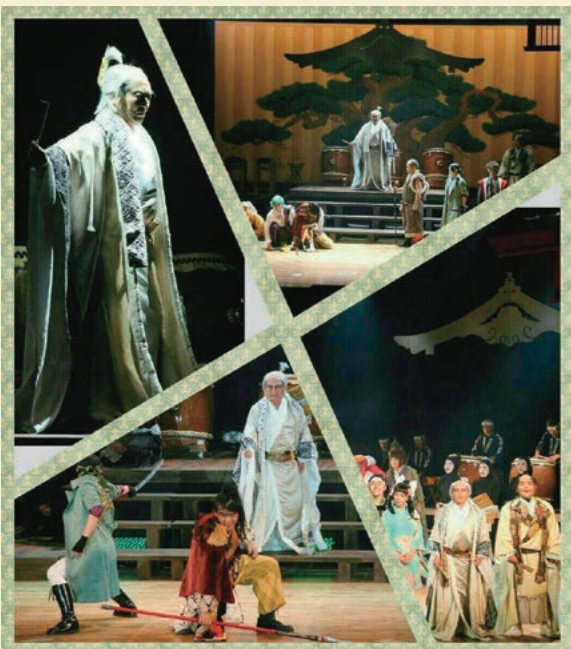
趣味にこころ

「好きこそ、もの上手なれ」
趣味はもちろん、個人的なものもありますが、やはり同好の人々が老若男女を問わず集まる趣味はコミュニケーションが取れて愉しさが倍増します。

私は6年ほど前から、地元の若手の演劇集団に参加しております。最初は応援でチケットを買って友人と観賞しておりましたが、その翌年、劇団の方から「ちょっと出演してもらえませんか」と言われ、私の乗せられやすく、負けず嫌いな性分で、気付けば出演する事になりました。しかし、いざ軽い気持ちで稽古初日の初顔合わせに参加すると、とんでもないことに気付かされました。まず、自己紹介をし、その後、早速、発声練習にうつりました。が、経験した事がないのでうまく言えず、さらに、直ぐに台本を渡され、読み合わせ、そのまま台詞を読みのですが、早速になぜか読み方の演出が入り、その流れの速さに振り回されっぱなしでした。一通りその日の稽古が終り、色々聞いてみると、代表と主だったメンバーが私の子どもと同年代であり、他のメンバーは20代ということに驚きを隠せ

ず、このメンバーと稽古して演劇をやっていくのは大変だと感じました。

劇団の皆さんは、仕事をしているので稽古は19時過ぎに始まり、月、水、土、日は朝からで、私も公務があり、なかなかすべての稽古には参加できませんでした。案の定、参加したら台詞は中々覚えられないし、身体も素早く動けない、場ミリ(立ち位置)や出入りが解らず、台詞が出てこないという状況ではされるといふ始末でしたが、何度か稽古したら徐々に馴染んできました。私にとって心地良かったのは「市長さん」とは呼ぶが、本当に市長とは思ってないところです。演劇と一緒にやる仲間だと言うスタンス、これがいい。今は演劇が趣味の一つになったみたいで公務を離れてのストレスの発散になっています。



地元劇団の本公演へ出演する筆者